教員によるエッセイコーナー

談話室

陽気な会話的哲学者たち

文学部英米文学専攻　准教授　若澤佑典（わかざわゆうすけ）

哲学を学び始めた学生時代、教室で遭遇する先生方は意外なほどに快活で明晰なストーリー・テラーだった。中世哲学の大家である先生は、ニコニコしながら「倫理的判断というのはね、跳躍を含むのですよ」と陽気な調子で私たちに語りかけてくれた。学生たちはワハハと笑いながら、ふと気がつけば存在と言語に関わる深遠な世界に誘われ、みんなで驚いたものである。

哲学史の若い先生は「研究者よりも塾講師のアルバイト歴が長いもので……」と人生の悲哀を込めつつも、毎回黒板に「○○とは何か？」と授業を総括する問いを大きく書いていた。哲学が悩める個々人の自由気ままな営みではなく、先行する哲学概念／哲学者への応答によって紡がれる「思考の連鎖」であることを学んだ。

私たちは多かれ少なかれ「××とはこんなものだろう」という先入観を持って日々を生きている。そして、実際の体験や学びの経験を通じて「××って実はこういうものなのだ」と、イメージと実態のギャップを発見し、驚くのである。学生時代の授業は「哲学者は寡黙な人だろう」とか「哲学の話は難解で意味不明だろう」という私の先入観を、先生方の会話的哲学世界によって大いに打ち壊してくれた。この爽やかな感覚こそが、後の自身を形作る、哲学的衝撃であったように思う。哲学の思考は会話の中で生まれ、世界にあるさまざまな物事をフレッシュに体験させてくれる、意外と陽気な営みでもあるのだ。

こうした若き日の「会話の一撃」から幾星霜、大学で准教授となった私は「会話の哲学」を研究主題とし、啓蒙思想のテクストを読みながら、18世紀英国の「賑やかな哲学の声」に耳を傾けている。愉しい文献を読んでいると、自身もいろいろ話したくなってくる。慶應義塾大学出版会から「一緒にラジオ番組を作りませんか？」とお誘いを受け、この春からポッドキャスト番組が始まった。気がつけばラジオ・ブースでマイクを前に話している。かように哲学の探究とは、意外さと鮮烈さに満ちている。



ポッドキャスト収録中の筆者

ざわざわ！
お喋り哲学ラジオ